

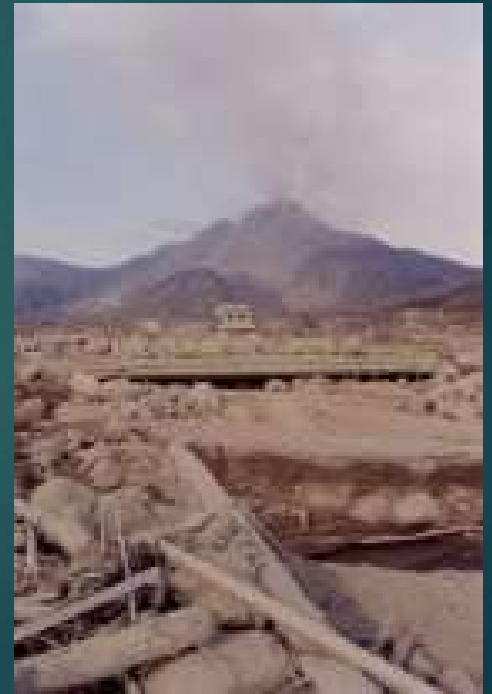
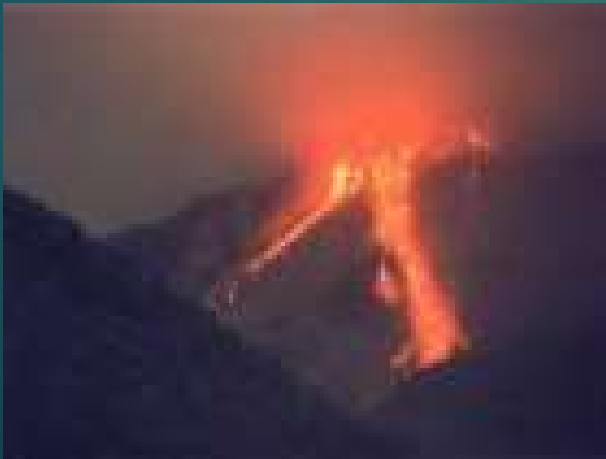
噴火災害からの復興 がまだすドームができるまで

—令和3年 長崎&島原視察報告—

都市調査会 谷井千絵

平成の大噴火

- ▶ 平成2（1990）年11月から平成7（1995）年2月まで続いた雲仙岳の噴火活動。198年ぶりの大噴火
- ▶ 38回の土石流と7回の大火砕流
- ▶ 死者41人、行方不明3人、負傷者12人
建物の被害2511件、被害額2299億4197万円



5年間に及ぶ噴火活動・・・

- ▶ 台風などの一過性の災害と異なり、被災地域が相次いで拡大し、我が国**災害史上例のない異常な長期災害**
- ▶ 人口密集地区において初めて、警戒区域、避難勧告地域が設定され、居住はもちろん営農や商店の営業など、**全ての活動が中止を余儀なくされたこと**により、直接的な被害もさることながら、**人口の流出や経済の停滞など、地域全体に深刻な疲弊をもたらした。**
- ▶ この間、国などの配慮により 21 分野 100項目もの広範囲わたり行政及び新たに創設された雲仙岳災害対策基金などによってその災害対策が講じられた
- ▶ 普賢岳の噴火活動が終息し、また、基金の 1,000 億円の増額と 5 年間の延長が実現したことを機に、地元で本格復興の気運が高まった。
- ▶ この気運をとらえ、**平成 9 年地域の方々と行政が一体となって、島原半島全体を視野に入れた地域の再生スケジュールとして「島原地域再生行動計画」を策定、島原半島復興についての総意と決意を表した。**
- ▶ この間にも、「島原市復興計画」、「深江町復興計画」や県においても平成 5 年 12 月に「雲仙岳災害・島原半島復興振興計画」が策定されている。

島原地域再生行動計画：がまだす計画

- ▶ 長崎県は、島原地域の本格復興のため、平成8年度を「復興元年」と位置づけ、半島全体を視野に入れた地域の再生スケジュールとして、平成9年3月に島原地域再生行動計画（愛称 がまだす計画）を官民一体となって策定
- ▶ この計画は、まだ災害が継続中の平成5年度に策定した雲仙岳災害・島原半島復興振興計画などを基本とし、**防災工事や農地の災害復興、交通体系の整備などの基礎的な事業から、農林水産業や商工・観光業の復興、各種公共施設の整備に至るまでの幅広い事業を対象に、事業主体、実施年度、財源負担などをでき得る限り明らかにした計画**
- ▶ 「がまだす」 = 島原地方の方言「がんばる」

計画の目標と重点27大プロジェクト

▶ スローガン

がまだず計画に計上された事業を着実に実行していくことにより、島原地域を『水清く緑にあふれ人つどいにぎわう島原半島』に、『前よりもっとすてきなまち』に、『前よりもっとゆたかなまち』にしていきます。

▶ 特に計画の中では、重点27大プロジェクトを定め、これを関連事業とともに連携しながら、重点的に推進。

計画策定の進め方 会議を全面公開

- ▶ 地域住民の計画づくりへの参加を促すために、計画に関心をもってもらうことから工夫。
- ▶ 計画の策定に当たっては、地元民間代表、学識経験者、国の機関、半島の1市16町、県などの70人の委員からなる計画策定委員会と、その下に建設、農林、水産、商工観光、生活文化の総勢348名からなる5つの専門部会を設置し、30数回に及ぶ会議を全て現地で開催、計画に盛り込むべき事業について具体的に検討。その全ての会議を全面的に公開とした。
- ▶ 会議内容は、「がまだす報告」として、即座に半島内の全市町に公表、各市町の窓口で見ることができるよう、発行回数は41回、総頁数は約1,000頁
- ▶ また、住民のアイデアを募集するために、「ガマダスファックス」を設置し、4か月余りの間に、86件もの提案があった。実現可能なものについては、計画の中に反映。
- ▶ 一方、計画への参加を住民に呼び掛けるために、テレビやラジオ、新聞広告、がまだすポスター、ステッカー、パンフレットなどにより効果的に広報を進めた。

「がまだす」の浸透

- ▶ このような状況の中で、地元では、失われつつあった方言である「がまだす」を冠した言葉が盛んに使われ始めた。
- ▶ 例えば、新しく製造・販売されることとなった地ビールの名称が公募され、その結果「ガマダスビール」と名付けられた。
- ▶ また、噴火活動が始まってから、まる6年にあたる昨年(2019年)の11月を「がまだす月間」とネーミング、地元民間の若手たちによる島原半島全体をあげての祭り「がまだす祭り」が開催され、メインイベントが開かれた会場では、2日間で11万人という半島初まって以来の人出で賑わった。
- ▶ 会議の全面公開が好評だったのか、マスコミもこの計画づくりには好意的であり、いろいろな場面で数多くの記事を掲載、また報道してされることとなり、地元の関心は否が応でも高まることとなった。
- ▶ この計画づくりは、計画策定委員長の言葉を借りれば、「島原半島の住民一人ひとりが主役であり、まさに半島あげての総力戦」であり、色々な面で稀にみる手法で進められました。計画づくりのプロセスそのものが一つの地域振興となった面もある。

計画の内容～重点27大プロジェクト

- ▶ 計画は27の重点プロジェクトと関連事業等からなっており,その主な内容を挙げると
- ▶ 半島地域の情報発信や交流拠点として,パーキングエリア,物販施設,レストラン 施設を整備する「道の駅の整備事業」
- ▶ 水無川流域一帯の火山観光フィールドミュージアム化を推進するための中核施設としての「島原火山科学博物館(仮称)建設事業」
- ▶ 災害のすさまじさとその教訓を後世に継承し,防災の重要性を内外に伝えるために,被災した家屋をありのままに保存する「土石流災害遺構保存公園(仮称)整備事業」
- ▶ 国立公園雲仙の再生事業で,火山活動で傷ついた森林の再生,雲仙・島原半島の自然,文化を情報発信する施設整備などを盛り込んだ「国立公園緑のダイヤモンド 計画雲仙ルネサンス計画(仮称)事業」
- ▶ 計画の実施期間は,平成9年度から13年度までの5か年間,当該期間内の総事業費は3千億円を超えるもの

計画の実現に向けて

- ▶ 「見たくなる計画書」地域住民の方々に読んでもらえるような様々な工夫を凝らした。事業名から事業主体,事業年度,事業実施箇所,事業内容,事業費までを具体的に明記。
- ▶ 表紙には,島原市出身で人気 TVキャスター草野仁氏に ボランティアで登場いただき,計画書の PR に一役買ってもらった。
- ▶ 巻頭には,災害発生時,小学校 1 年生だった子供たちが 6年生になり,当時の思い出や将来の夢について書いた作文を掲載し,21 世紀を担う子供たちの計画であることを強調。
- ▶ 計画の重点プロジェクトは,見開き 2 頁で 1 プロジェクトが分かるようにレイアウトを工夫し,かつ,完成予想図や写真などを用いて,事業のイメージがわかりやすくなるように心がけた。
- ▶ 計画の進行管理は、民間と行政のメンバーで構成する「**がまだす計画推進委員会**」を発足し,計画の今後の 進行管理を行い,計画に計上された一つひとつの事業を着実に実行に移していくこととした。

主なプロジェクト

10

- ▶ **われん川整備**：島原市では、湧水を源とする澄んだせせらぎが、生活用水として、また快適な環境やふるさとのシンボルとして、人々のくらしに欠かせない役割を果たしていた。安中地区を流れるわれん川もそんな清流の一つ。安中地区は土石流によって大きな痛手を受けたが、その清流を中心に地域の復興をめざすもの。
- ▶ **島原深江道路**：火山災害に強い道路網を整備し、地域の復興をサポートするため、島原深江道路、島原中央道路、そして地域高規格道路として島原道路の建設・整備がなされた。
- ▶ **砂防計画**：噴火がおさまっても火口から噴き出した堆積物は、しばしば土石流を起こした。こうした被害を食い止めるため、水無川や中尾川では砂防堰堤（ダム）や、導流堤・導流工が建設された。
- ▶ **地域からの情報発信**：被害から立ち直ろうとする島原半島のさまざまな試みを全国の人々に知ってもらい、理解を深めてもらうために、防災情報を伝える「はっと・ほっとチャンネル24」とホームページ、火山災害のようすを展示する「**大野木場砂防みらい館（被災校舎の保存）**」「**雲仙岳災害記念館**」など、さまざまな方法で情報の発信が行なわれた。新しい島原をアピールするさまざまなイベント（地元主催のコンサートやフェスティバルなど）が開かれ、全国に向けて「復興する島原」を伝えた。

がまだすドーム（雲仙岳災害記念館）

11

- ▶ 長崎県により建設、2002年（平成14年）7月1日にオープン。運営は島原市長を理事長とする公益財団法人雲仙岳災害記念財団。2018年（平成30年）にリニューアルオープン。
- ▶ 建物は2階建て。無料スペースと有料スペースに分かれ、無料スペース（1階の半分）をメディアライブラリーとして一般に開放。
- ▶ 主なコーナーは「災害の記憶」、「雲仙岳のいま」、「ビデオライブラリー」、「資料閲覧」、「デジタル雲仙岳災害記念館」、「フィールドミュージアム案内」、「島原半島の観光案内」、「島原半島の歴史」、「読書コーナー」、「姿をかえた雲仙岳」、「火山としての雲仙岳」、「世界の雲仙岳」、「平成大噴火シアター」、「噴火と予知」、「予知から防災へ」、「雲仙噴火の歴史」、「火山と共生」など
- ▶ 売店、カフェ・レストランを併設。
- ▶ 開館時間：9:00～18:00（最終入館は17:00まで）
- ▶ 休館日：年中無休
- ▶ 観覧料：有料スペースは、大人1,050円、中学生740円、小学生530円
- ▶ 駐車場：無料（一般車400台、バス20台）

体験型の火山学習施設として、工夫され充実した展示、ワークショップなども開催。屋内だけでなく屋外も合わせて、様々な角度から火山学習に資する施設となっている。噴火災害の脅威と復興への歩み、人々の生活と自然の関わりなど学ぶことができることから、教育旅行の誘致に力を入れている。



道の駅「みずなし本陣ふかえ」物販施設の 営業終了 コロナで経営難

(2021.11.25毎日新聞、2021.11.26朝日新聞)

- ▶ 2021年11月末で営業を終了。運営会社の第三セクター「みずなし本陣」が新型コロナウイルスの感染拡大の影響などで経営難に陥り、事業から撤退するため。
- ▶ みずなし本陣ふかえは1999年4月に設置された島原半島で唯一の道の駅。市が運営会社に資本金の3分の1に当たる2460万円を出資している。敷地3万2000平方メートルのうち物販施設が4分の1。
- ▶ 1999年4月に開業し、2020年11月末までの来場者は累計で1155万3千人にのぼる。熊本地震の16年から入場者が急減し、コロナ禍に見舞われた20年度は前年比45・1%の15万2千人と、大きく落ち込んだ。
- ▶ 「みずなし本陣ふかえ」の施設のうち、土石流被災家屋保存公園や駐車場やトイレは県が所有。松本政博南島原市長は、これらの施設を今後も利用できるよう、引き続き県や国と協議していく考えを示した。

ご清聴ありがとうございました。

13



引用及び参考資料：
がまだすドームホーム
ページ及び関連資料、
長崎県資料、朝日及び
毎日新聞記事
視察参加者撮影の写真